

教皇レオ 14 世とともに

日本カトリック難民移住移動者委員会秘書 柳本 昭

教皇フランシスコが帰天され、新教皇レオ 14 世が選出されました。コンクラーベについての報道によって、日本社会でも話題になり、わたしのまわりでも散髪屋さんやお祭り仲間など、教会外の多くの方から話しかけられました。みなさん好意的に受け止められていてうれしかったです。

レオ 14 世は初めてのアメリカ合衆国出身の教皇ということで話題になっていますが、教皇は 2014 年からペルーに派遣され、前教皇と同様、ラテンアメリカの人々の司牧に携わり、その中でもとくに厳しい状況に置かれている人々に寄り添ってこられました。

教皇は、就任後初のメッセージとなる外交団への演説の中で、「いかなる人も、すべての人格の尊厳を守る状況を推進する努めを免除されることはありません。とくに守るべきなのは、国民であれ移住者であれ、これから生まれる胎児から高齢者まで、病者から障害者までの、もっとも脆弱な人、無防備な人の尊厳です」と述べられました。また、前教皇の思いを受け継ぎ、「橋を築くべきであって、壁を築いてはならない」とも語られています。これは、トランプ政権をはじめとする自国第一主義、排他主義の広がる世界に対する強いメッセージです。

菊地枢機卿は「すでに主イエス・キリストが選ばれているに違いない、ペトロの後継者を探すために投票を続け」た、とブログに書かれています。そこには現代の世界情勢に対し、聖霊が働いたということです。わたしたちも新しい教皇とともに、国籍のない神の国を目指してともに歩んでいきましょう。



特集： 船員の日（7 月 13 日） 船員司牧（ステラマリス）

今号の内容

- 2025年 船員の日メッセージ 山野内倫昭司教 p.2
- 「ステラマリス」 船員司牧の最初の体験 p.4
- 母港をつくる：小名浜でのステラマリスの誕生 p.5
- 船員司牧(ステラマリス) 拡大コア会議 開催報告 p.6
- 追い詰められる難民申請者と非正規滞在者
～2023年改定入管法から1年 p.7
- APALA(スペイン語話者司牧社会)活動報告とお知らせ p.9
- 第2回 ベトナム人司牧者のつどい 開催報告 p.10

船員の日 共同祈願文

主(しゅ)よ、海(うみ)で働(はたら)く人々(ひとびと)をあらゆる危険(きけん)から護(まも)り、導(みちび)いてください。

また、わたしたちがこの人々(ひとびと)に感謝(かんしゃ)し、同(おな)じ船(ふね)で神(かみ)の慈(い)いつくしみをたたえ、生(い)きていくことができますように。

教皇庁人間開発のための部署は、7月の第2日曜日を「船員の日」と定め、世界中の司牧者、信徒に船員たちのために祈るよう呼びかけています。日本カトリック難民移住移動者委員会も船員たちとその家族のために祈るよう皆様に呼びかけます。

海で働く人々とその家族のために

人々の生活と世界の経済に重要な貢献をしている、海で働く人々、船員たちとその家族、さらに彼らを支援している司牧者やボランティアの人々に思いを馳せる日として、「船員の日」は定められました。この日は、キリスト教を基盤とするエキュメニカルな動きの一環として、1975年イギリスで始まりましたが、英仏海峡を越えて広がり、現在は全世界で取り組まれています。世界の9割近く、そして日本では99.7%もの物資を海上輸送しているおよそ180万人の船員たちのために、今年も祈りを呼びかけたいと思います。

日常生活を支える無名の英雄たち

荷物を安全に港まで運ぶ船員たちの献身的な奉仕なしには、わたしたちの生活は成り立ちません。2012年に、国際海事機関(IMO)の当時の関水康司事務局長が「わたしたちが手に取るもののほとんどは、どこかの時点で、海を渡って運ばれてきたものです」と指摘した状況は、今もまったく変わっていません。船舶は、全ての人々が頼りとする食料、燃料、原材料、商品を輸送しています。わたしたちの目には見えない船員たちの働きが、暮らしを支えてくれているのです。

言うまでもないことですが、一人ひとりの船員には、それぞれの愛する家族がいます。船員の多くは、9カ月から12カ月の間、家を離れて航海しています。家族との食事、抱擁、そして誕生日を一緒に祝うことなどを恋しく思いながら。嵐の中を航海し、何週間も太陽を見なかったり、果てしなく広がる海の水平線を眺めたりしながら懸命に働いています。船舶が届ける物品をわたしたちが享受する一方で、船員たちは、新年や記念日、休日を、遠い家族を思いながら過ごすのです。

困難を乗り越えて

海での生活は過酷で孤独なものです。激しい嵐から、海賊の脅威や戦争にいたるまで、船舶は、あらゆる困難に直面します。ミサイルやドローンの攻撃にもかかわらず、数百隻の船舶が紅海を航行し続けています。新型コロナウイルス感染症のパンデミックの数年間、大勢の船員が、その契約が満了しているにもかかわらず家に帰ることができず、何カ月も海上で立ち往生しました。このような状況の中で、狭いスペース、プライバシーのなさ、昼夜を問わない過酷な労働に従事しつつ、精神的ストレスやホームシックと闘う多くの船員がいます。



彼らが届ける船荷は、港を経由し、世界中の家庭の毎日に多大な恩恵と糧をもたらしています。スーパーで食品を買ったり、ドラッグストアで薬を買うとき、朝起きて服を着るときにも。船員たちは、その仕事を通じて世界中の家族の暮らしを結びつけています。

祈りのうちに彼らに思いを馳せながら

心からの感謝をもって、このような船員たちを思い巡らす時間をもちましょう。すべての船員とその愛する家族の安全と幸せのために、夕食時、また就寝前に、短い祈りや黙想をささげることができます。こうしたわたしたちの祈りが、暴風雨や孤独の中でも、また心配して待つ家族のなぐさめのためにも、大きな助けとなるでしょう。

港湾で働く人々、港のチャプレンにも感謝します。そして、寄港した船員を訪問して小教区で歓迎し祈りや食事の時間を共有したり、依頼があれば車で送迎したり、プレゼントのニット帽を編むなど、各地のボランティアグループや小教区での取り組みにも敬意を表します。これらの活動を参考にしながら、日本のステラマリス(船員司牧)がさらに広がり、根付いていくことを願っています。

2025 年 7 月 13 日

日本カトリック難民移住移動者委員会

委員長 山野内 倫昭

聖マリア、海の星、船員たちの安全をお守りください。

あなたの保護と導きが彼らとともにありますように。

激しい波に直面する時、暗闇の中で航海を続ける時、
あなたの光で道を照らし、安らぎと勇気を与えてください。

彼らの家族と愛する人々に心をあわせ、祈ります。

彼らが大海原で活躍し、無事に帰って笑顔で家族や友人と再会できますように。

あなたの祝福が彼らとともにありますように。アーメン

「ステラマリス」 船員司牧の最初の体験

現在、福岡教区の大楠教会と美野島司牧センターにおいて司牧しております、デソーザ・ジョンソンと申します。わたしは2006年1月30日に来日し、まず沖縄の国際言語文化センターで一年間日本語を学びました。その後、埼玉でも日本語を学ぶ傍ら、熊谷教会をはじめとする複数の教会で司牧に協力しました。これまで、那覇教区の小禄・普天間教会、さいたま教区の東松山・小山・上三川・真岡教会、そして福岡教区高宮教会など、さまざまな地域で司牧の務めを果たしてまいりました。



2024年4月に大楠教会への任命を受けた際、もう一つの新しい役割として、福岡教区の司教様より「船員司牧」の任務をいただきました。わたしにとっては未知の領域であり、不安と希望が入り混じるスタートでした。しかしこの新しい使命は、信仰と人とのつながりの深さをあらためて見つめ直す、かけがえのない機会になると信じて、歩み始めました。

最初の訪船は、当時、新田原教会の主任司祭であった井手公平神父様と共に行いました。訪れたのはミャンマー出身の若者たちが乗る船でした。当初、船員司牧についての知識も経験も乏しく、何をしたらよいのか手探りの状態でしたが、井手神父様と共に小さなプレゼントを持って訪れました。その場で交わした笑顔、そして彼らの温かい歓迎に、わたしは心から感動しました。

わたしがインド出身であることを知った彼らは「インドはミャンマーの隣国だね」と笑顔で話してくれました。言葉の壁を越えて、隣人として、心が通じ合った瞬間でした。わたしは何か特別なことをしたわけではありません。ただ訪れ、顔を合わせ、短い対話とささやかな贈り物を交わしただけです。しかし、それだけのことが、彼らにとって「見捨てられていない」と感じる大切な体験となっていたことを、彼らの表情からはっきりと感じ取ることができました。



「ステラマリス(海の星)」とは、聖母マリアの称号のひとつであり、船員たちの守護者として知られています。この活動を通して、聖母マリア様がどれほど多くの人々に希望と平和をもたらしているのかを実感します。過酷な労働と長い航海の中で、船員たちはしばしば孤独と戦っています。そんな彼らに寄り添い、耳を傾け、祈ることは、わたしたち教会の大切な使命のひとつです。

今後も、ステラマリスの名のもとに、より多くの船員たちと出会い、福音の希望を分かち合うことができるよう努めてまいります。神様が導いてくださるこの道に感謝しつつ、与えられた使命に忠実でありたいと願っております。

福岡教区 大楠教会主任司祭
美野島司牧センター所長
デソーザ・ジョンソン

母港をつくる:小名浜におけるステラマリス・ミニストリーの誕生

わたしは、自分が船員司牧(ステラマリス)に関わることになるとは、夢にも思っていませんでした。振り返ると、わたしとこの使命とのつながりは何年も前に始まっていたのですが、当時はそれに気づいていませんでした。わたしの兄は、かつて海上で働く船員で、カナダで病に倒れ入院したことがありました。偶然にも、わたしと母はそのときニューヨークに滞在していて、ステラマリスの方から兄の状況を知らせてもらい、兄を訪ねることができました。当時のわたしは、ステラマリスのことを単なる船員を支援する団体の一つだとしか思っていませんでした。その使命の深さ、思いやり、重要性については何も知らなかったのです。

その理解が変わり始めたのは、福島県いわき市の小名浜で、船員たちと出会ったときでした。フィリピン人船員たちが、フィリピン人が経営するお店に集まって、クリスマスシーズンの厳しい寒さの中、家族から遠く離れて過ごす時間をやり過ごしていました。その光景を見たとき、わたしは兄を思い出し、彼が家族を支えるために払った犠牲を心から感じました。そして初めて、兄が海上で過ごしたクリスマスに、どれほどの孤独を耐えたのかを実感したのです。



そのとき、ステラマリスの使命がわたしにとって現実のものとなりました。(ただ船員のためのサービスではなく、個人的な使命として)多くを黙って背負う人たちに、慰めとつながり、希望を届けるための使命と感じました。

わたしにとって、それは単なる偶然ではなかったと思います。当時、いわき教会の主任司祭だった幸田和生司教が、今では「タンバヤン小

名浜ストア」として知られる建物を祝別し、フィリピン人女性が経営するそのお店で、アントニオ・マチアス神父とわたしに、この活気あるコミュニティとの関わりを勧めてくださったのです。幸田司教の招きに応じてわたしたちはその店を訪れ、20名以上のフィリピン人船員たちに温かく迎えられました。彼らの多くは、すでに他の国でステラマリスの思いやりある支援を受けた経験があり、ミサだけでなく幅広いサポートを提供していることを知っていました。

訪問の際にわたしたちが最も心を動かされたのは、クリスマスが近づくなかで彼らが家族に抱く、深い、痛みをともなうほどの思いでした。それは単なるホームシックではなく、愛、つながり、信仰、そしてコミュニティの温かさを渴望する思いだったのです。彼らの言葉と瞳から、孤独の静かな痛み、そして「誰かが自分たちを気にかけてくれているかもしれない」という希望を感じ取りました。その出会いを通して、わたしたちの心にはっきりと、緊急性をもった召命が生まれました。それは、小名浜港にステラマリスを(単なるミニストリーとしてではなく、「ホーム」として)もたらすことでした。愛する人々から長く離れて過ごす船員たちにとって、歓迎と慰め、そして居場所を提供するために。

その呼びかけに応えるかたちで、仙台教区のステラマリス・ミニストリーが誕生しました。その使命は、シンプルでありながら奥深いものです。船員だけでなく、小名浜港で働く外国人労働者にも手を差し伸べ、外国人も日本人も、誰もが「ここは自分の教会共同体だ」と感じることのできるコミュニティを育むことです。

わたしたちはまだこの旅路の始まりに立ったばかりですが、小さなミニストリーはすでに確かな足がかりを得ています。現在、毎月タンバヤン小名浜ストアの 2 階で、多言語ミサを行なっています。この場所は、幸田司教によって祝別された空間です。教会堂ではありませんが、心のこもった聖なる場所です。今は、祈りと交わり、癒やしのためのわたしたちの聖域となっています。

マチアス神父は、2025 年 1 月 19 日にわたしたちの最初のミサを司式してくださいました。それ以来、毎月の集いには、通常 4～6 人の船員たちに加え、常連の信徒たち、多くはフィリピン人女性と、カトリック信者でない夫や子どもたちなどが加わる、小さくも美しいコミュニティが生まれています。ミサは単なる典礼ではなく、恵みの瞬間であり、家族そのものです。故郷から遠く離れた厳しい道を歩んでいるすべての人にとって、「あなたは一人ではない」というメッセージを伝える場となっているのです。



クラリタ(クレア)・サンチェス
仙台教区信徒宣教師

船員司牧(ステラマリス) 拡大コア会議 開催報告

去る 3 月 11 日(火)～12 日(水)、日本カトリック会館にてオンラインの拡大コア会議が開催されました。委員長の山野内倫昭司教、担当司教の森山信三司教、秘書の柳本昭神父、全国担当者のギャリー・ゲストヴェオ神父はじめ、ステラマリスコアメンバーのほか、各地の港で司牧や訪船活動を行っている、もしくは準備している司牧者、活動者がつどい、各々の船員司牧活動の方法や経験共有を行いました。

苫小牧港、小名浜港、鹿島港、大洗港、東京港、川崎港、横浜港、名古屋港、大阪港、神戸港、北九州港、博多港で活動する各報告者からは、「教区ステラマリスの広報方法」「船員の霊的ケアのニーズとアプローチについて」「港の管理区域内に入る方法」「船上で葬式を行う場合」「船上ミサについて」「漁船員への関心と関わり」「船員司牧に関する情報収集手段について」「ステラマリスの国際会議」など、現場からの情報や経験共有、関心事からの具体的な質疑があり、今後の活動に向けての提案、意見を出し合いました。



追い詰められる難民申請者と非正規滞在者～2023年改定入管法施行から1年

2023年6月、カトリック教会を含む多くの市民団体や野党の反対を押し切って改定入管法が成立し、2024年6月10日に全面施行されてから1年が経ちました。この法改定は、難民制度の改善がほとんど行われないうまま、3回目以降の難民申請者を強制送還可能とし、帰国できない事情を抱える外国人が退去命令に従わない場合、刑事罰を科す内容を含みます。長年、国際社会から改善を求められてきた収容制度の抜本的見直しもされず、新たに導入された監理措置制度に対する強い懸念が示されてきました。



改定法施行からの1年間、カトリック教会、外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教協議会(外キ協)のようなキリスト教会のエキューメニカルなネットワーク、そして日本カトリック難民移住移動者委員会(J-CaRM)も加盟する移住者と連帯する全国ネットワークなどの団体では、関係機関に対して制度運用の改善を求めるとともに、入管法の改定によって影響を受ける人々への支援連携を強化してきました。昨年11月以降の動きをいくつか報告します。

難民申請者の強制送還

改定入管法の施行により、従来の「送還停止効」の例外として、3回目以降の申請者や一定の実刑判決を受けた者は強制送還の対象とされました。2024年には、難民申請者19人が実際に強制送還されたことが入管から発表されました。

しかし、最近の判決では3回目以降の申請者が難民と認められた事例も複数あり、送還された人々の中にも本来保護されるべき難民が含まれていた可能性は否定できません。法では「難民と認定される相当な理由がある資料」を提出した場合は送還の対象外とされていますが、その判断基準は明示されておらず、早急な救済措置と透明な運用が求められています。

難民・補完的保護の認定現状

政府は、2025年3月に「令和6年における難民認定者等について」を発表し、2024年に190人を難民認定したことを明らかにしました。2022年以降、軍事クーデターが起きたアフガニスタン出身者が毎年100名を超えて集団認定されていることから、難民認定者数は増加していますが、アフガニスタン以外の国籍者の認定は88名で、難民認定率は2パーセント未満にとどまっています。認定に至るまでの審査期間の短縮も求められています。

改定入管法で政府が難民認定制度改善とアピールした補完的保護対象者認定制度については、2023年12月から他の改定に先行して施行され、2024年に1,661人が認定されました。しかし、そのうちの97%がウクライナ国籍者に偏っていることから(他には、シリア17人、ミャンマー13人、スーダン11人など)、他の出身国者に対して同じ基準で審査されたのかについての疑問が弁護士団体等からも指摘されています。

難民申請者の生活困窮への取り組み

この間に目立つのは、アフリカ諸国から来日する難民申請者の急増です。コロナ禍で減少した難民申請者数はここ数年で戻り、2023 年、2024 年には 1 万人を超えました。これに対して、難民申請者に対する公的支援の枠組みである「保護費」の対応がまったく追いついていないことが支援団体の間でも大きな課題として認識されています。この 15 年の難民保護費の対象は、年間 200 人台～600 人台で推移していますが、難民申請者の増加にもかかわらず、保護費の予算は減額していることは大きな問題です。2023 年秋ごろには、難民支援団体の事務所近くの公園などで常時 10 数名の難民申請者がホームレス状態になっていることが報道されました。東京周辺の難民支援団体、生活者困窮者支援団体、宗教団体などが支援対応しているものの、対応が置いつかない状況でした。

難民申請者が急増するなか、2023 年には申請から 6 カ月～8 カ月かかって何とか受給が認められていた保護費が、2024 年になると、さらに多くの申請が殺到し、数カ月ホームレス状態の難民申請者や妊娠中の女性申請者までが、申請却下されるという事態が発生しました。こうした深刻な状況から、2024 年秋以降は、移住者と連帯する全国ネットワークの省庁交渉でも重点を置いて要請したり、東京を中心として活動する数団体が連名で保護費に関する緊急要請を行うなどの緊急の取り組みが行われました。2025 年 4 月より、保護費の主管が外務省から入管庁に移行しており、引き続き運用を厳しくチェックし、保護費の増額と適正な運用を求める必要があります。

こうしたなか、難民・外国人支援の民間団体や生活困窮者支援団体、宗教団体などが連携して、難民申請者の生存権を保障するために活動しています。J-CaRM でも緊急援助費を活用し、公的支援を受けられない難民申請者の生活や医療費の支援などに取り組みました。

非正規滞在者の救済を！

日本に長年暮らし母国には帰国できない非正規滞在の外国人は、難民申請中の人々だけではありません。2023 年 8 月に「日本生まれ日本育ちの在留資格のない子どもとその家族」に対する特例措置の方針が示され、2024 年には一定数の非正規滞在の外国人に在留特別許可が認められました。しかしその救済の枠からこぼれ落ちた人々も少なくありません。こうした非正規滞在の外国人の生活費や医療費などを複数の民間支援団体等が連携して支えています。J-CaRM も運営にかかわる外キ協の「難民・移民いのちのなかまの協働基金」は 2024 年度も寄付金を集め、主に非正規滞在の世帯の子どもへの支援を継続しています。



J-CaRM では今後も引き続き、非正規滞在者のいのちと生存権を守るための法制度の改善や在留特別許可を求めるアドボカシー活動、そして関係団体との支援の連携を継続していく予定です。

山岸素子(J-CaRM 専門委員)

APALA（スペイン語話者司牧社会）活動報告とお知らせ



APALA significa agentes de la pastoral latinoamericana en Japón. Somos un equipo de laicos, religiosas y sacerdotes hispanohablantes dirigidos por Monseñor Mario Yamanouchi. Como grupo organizamos actividades con el fin de fortalecer la fe de los inmigrantes hispanos en Japón.

Este año jubilar de la esperanza se realizó el 29 de abril la primera peregrinación organizada por APALA a la iglesia de Mito en Ibaraki. La misa fue celebrada por Monseñor Mario Yamanouchi y fue también misa de honras fúnebres por el Papa Francisco fallecido el pasado 21 de abril. Nos acogieron las misioneras eucarísticas de la Santísima Trinidad. Participaron en la peregrinación familias de Yokohama, Tokio, Tochigi, Ibaraki, participando japoneses, latinos y vietnamitas. Luego de la misa en el hall de la iglesia la comunidad reunida tuvo unos momentos de saludo y finalmente un momento de esparcimiento familiar en el parque de los ciruelos de Mito.



Esta peregrinación familiar permite a los niños tener una privilegiada experiencia comunitaria de fe. Dada la acogida que tuvo la peregrinación, incluida la posibilidad de confesiones en español, se ha programado una nueva peregrinación a la iglesia de Matsugamine en Utsunomiya el 28 de junio.

Nuestra página web ofrece gratuitamente recursos formativos en español. Nuestra labor formativa gratuita online es todos los viernes por Facebook a las 8pm. Asimismo los días 13 de cada mes a las 8:45pm en Facebook se reza el rosario con la intención de la unidad de las familias.

APALA(アパラ)は、在日ラテンアメリカ系信者のための司牧活動を行うグループです。わたしたちは、信仰を深めることを目的として、スペイン語を話す信徒・修道者・司祭たちが集まり活動を行っています。

希望の聖年である今年、4月29日に茨城県水戸教会への初めての巡礼が行われました。ミサは山野内マリオ司教司式で、4月21日に逝去されたフランシスコ教皇の追悼ミサも兼ねて行われ、ミサには三位一体の聖体宣教女会のシスター方が迎えてくださいました。巡礼には、横浜・東京・栃木・茨城から家族が参加し、日本人、ラテンアメリカ人、ベトナム人がともに参加しました。ミサの後には、教会のホールで挨拶のひとときを持ち、最後に水戸の梅園で家族の憩いの時間を過ごしました。

この家族巡礼は、子どもたちにとって信仰共同体としての貴重な体験を与えるものです。今回の巡礼はスペイン語での告解の機会もあり、多くの方々に喜ばれましたので、6月28日に宇都宮の松が峰教会への新たな巡礼が予定されました。

わたしたちのウェブサイトでは、スペイン語での信仰形成のための教材を無料で提供しています。また、毎週金曜日の午後8時より、Facebookにて無料のオンライン講座を行っています。さらに、毎月13日午後8時45分からは、Facebook上で家族の一致を意図してロザリオの祈りを行っています。 APALA コアメンバー一同

¿Quieres profundizar tu fe en español?
スペイン語でもっと信仰を深めたい?

¿Te gustaría tener apoyo para compartir
con tus hijos la fe en español?
スペイン語で子どもたちに信仰を伝える
ためのサポートが欲しい?

Vístanos リンク先

APALA-JAPÓN

アパラ・ハボン



BLOG



YOUTUBE



FACEBOOK

第2回 ベトナム人司牧者のつどい 開催報告

去る3月18日(火)～19日(水)、福岡の旧神学院にてベトナム人司牧担当者のつどいが開催されました。仙台教区の担当者は急な用事のため参加できませんでしたが、それ以外の14教区から担当者が参加しました。2016年に潮見の日本カトリック会館で開催された、第1回ベトナム人司牧者研修会・ネットワークミーティング以来、今回初めて全国すべての担当者が顔をそろえた機会となり、これは歴史的な出来事といえます。

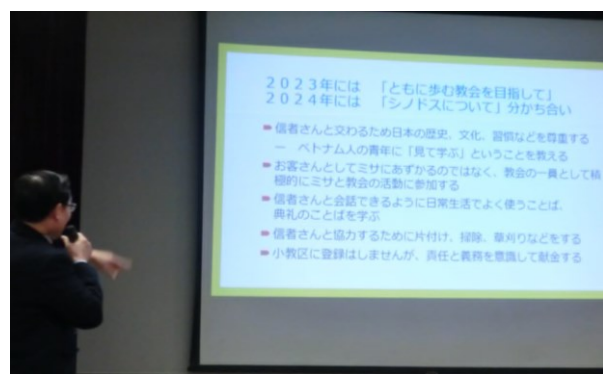
日本カトリック難民移住移動者委員会の担当司教である森山信三司教、そして福岡教区のヨゼフ・アベイヤ司教は、研修会の2日間を通して共に参加してくださいました。また、長年在日ベトナム人司牧にたずさわってこられた、グエン・フー・ヒエン神父、ダム・ロー・シアン神父やシスター方、日本人の司祭数名、J-CaRM スタッフ2名も同伴しました。



開会にあたり、森山司教がご挨拶と研修会の目的についてお話してくださいました。その後、アベイヤ司教による講話があり、「多様性から一致を築く教会の精神」「神の国の証し」について語られました。ご自身の経験に基づき、「愛すること」「派遣された場(教会・学校・施設など)で文化を尊重し学ぶこと」「自らのアイデンティティを確信しつつ貢献すること」「見る・聴く・行動すること」の大切さを強調されました。



その後、各教区の担当司祭が自教区の現状や司牧における課題について報告し、情報と意見の交換が行われました。主なテーマとしては、ミサや秘跡の司牧、結婚手続き、洗礼準備・結婚講座、子どもの信仰教育、シスター方のための典礼・神学研修、社会・労働問題における法的支援や相談対応などが挙げられました。





2日目には、昨年2024年2月の第1回ベトナム人司牧者のつどい(大阪開催)で挙げられた提案や、前日に話し合われた内容をもとにディスカッションが行われました。管区別の分かち合いと発表もありました。現在、多くの司牧活動は若者を対象としていますが、今後は日本で生まれ育った子どもたちや、1980年代に来日した信者たちへの司牧にも力を入れるべきだという意見も出されました。また、今後の集まりに信者の参加の機会を設けることで、信者の願いや意見をより直接に聞くことができ、協力も得やすくなるだろうという提案もありました。

つどい最終日は、聖ヨセフの祝日にあたり、閉会のミサが捧げられました。聖ヨセフの取り次ぎを願い、在日ベトナム人司牧がより豊かに実を結ぶよう祈りを捧げました。霊名を祝うグエン・タン・ニャー神父、グエン・タン・ヒ神父と共に、喜びと感謝のうちに研修会は締めくくられました。

J-CaRM ベトナム人司牧チーム
ブー・カイン・トゥオン(神言会)



2025年7月13日

船員の日

Sea Sunday 2025

港で働く人々とその家族のために



わたしたちの生活に必要な物資の99.7%は、海を渡り、船で運ばれます。

船員たちの命がけの働きがわたしたちの生活を支えています。

港に入ってきた船員たちが「わが家」にいるように感じられるよう関わるのが船員司牧です。

船員のみなさんへの感謝と支援活動にご協力をお願いします。

教皇庁総合人間開発省は、7月の第2日曜日を「船員の日」と定め、世界中の司牧者、信徒に船員たちのために祈るよう呼びかけています。

日本でも船員たちとその家族のために祈り、尊敬と感謝を表すよう、皆様に呼びかけます。

